

頑張る

農業法人

京都市左京区の景勝の地・大原地域で、地域資源を生かし、魅力ある地域農産物・加工品の販売や、大原地域の情報発信の場であり、都市住民との交流拠点の役割を担う「里の駅 大原」を経営する農業法人「㈱大原アグリビジネス21」。

「里の駅 大原」には、年間17万人近くが来場。出荷農家の経営効果につながり、地域に移住した若手農家グループも專業で生計を立てるなど、農業と観光を結ぶ地域興しの拠点となっている。

大原地域は、三千院や寂光院などの名所で知られ、里山で棚田も広がる京都を代表する観光地。しかし、近年では農地を転用した住宅地や農家の高齢化、担い手不足など

で遊休地が増えているため、大原の里を守るには農業活性化が大事と、農家仲間5人が1999年に「大原農業クラブ」を設立した。

同クラブでは、「大原ふれあい朝市」を国道沿いの製材所跡を借り、毎週日曜日に開設する。野菜類や女性グループの漬物、すしなど、地域ならではの加工品が観光客らの注目を集め、人気スポットとなった。さらに、有名料理店のシェフグループも食材として買い求めに訪れるなど、年間売上も6000万円を超えるまでにいった。

2006年から15ヶ所の圃場整備が行われ、その一画を活用し、「大原農業クラブ」が中心となって07年2月、J A京都中央大原地域運営協議会など

京都市左京区 (株)大原アグリビジネス21



「里の駅 大原」の運営に頑張る山本取締役④と森下政尋支配人

農業と都市住民を結ぶ

「里の駅」を拠点に地域興し

まし合いながら農産物を生産。観光農村の拠点「里の駅」に出荷し生計を立てている。

取締役の山本壽典さん(63)は「若手グループ大原坊は、減農薬栽培にこだわりの、京都市内の料理人やホテルシェフも、安全・安心なので買い求めが立ってらる」と評価している。

大原地域は露地栽培が多く、季節によって端境期の品目確保が厳しい状況がある。また1月から3月までは、観光客が少なくなくなり、どう対応するかが課題だ。

山本さんは「年間を通じて客のニーズに対応した品ぞろえを検討する。若手農家の協力でハウス栽培を計画し、多品目出荷を目指したい」と、これからの思いを語る。

と法人を設立。行政の支援を受けて「里の駅 大原」を建設した。

J A京都中央大原支店の前の2700平方メートルの「里の駅 大原」は、木造平屋建て2棟。常設農産物販売所「旬菜市場」、カフェレストラン「花むらさき」、餅加工施設「もちの館」がある。

大原アグリビジネス21は、農家を中心とした103人が出資者。宮崎良三代表取締役ら5人が役員。正従業員3人とパートタイマー合わせて25人。旬菜市場には地域や近隣の農家約100戸が、新鮮野菜、卵、加工品、花きなどを出荷。さらに「もちの館」では、地場産もち米、シソ、ヨモギを

使った餅類を早朝から加工して販売。いずれも飛ぶように売れている。1年目の売上は1億8000万円にも伸びた。毎週日曜日上午6時から「ふれあい朝市」も敷地内で開催する。

地域の最近移住した30代の若手農家15人が、グループ大原坊を結成。励

▽電話 075(744)4321

左京区大原野村町342